



■ショートコメント■

◆昭和のバブル全盛期に公開された、阿佐田哲也原作、若かりし真田広之主演の映画『麻雀放浪記』(84年)はめちゃ面白い映画だった。修習生時代から弁護士5年目頃まで、忙しい仕事の合間をぬってよく麻雀をしていた私は、当時、大橋巨泉が司会をしていた「11PM」の麻雀もよく見ていたものだ。

そんな名作が、『孤狼の血』(18年)『シネマ42』33頁)をはじめ、大ヒット作を続けている白石和彌監督の手でリメイク。そう聞くと、そりゃ必見!だが、よく調べてみると、いやいや、本作はリメイクではなさそうだ。

◆主人公の「坊や哲」を演じるのは今をときめく斎藤工だが、“とある役”でピエール瀧を出演させていたのが運の尽き。なぜなら、ピエール瀧がコカインを使用したとして、麻薬取締法違反(使用)容疑で逮捕されてしまったからだ。そのため、松竹映画『居眠り磐音』は出演場面を撮り直したうえで、予定通り公開することになったが、本作は「作品に罪はない」との理由でそのまま公開に踏み切った。その賛否は人それぞれだが、私は公開に賛成だ。

◆敗戦後の1945(昭和20)年、九蓮宝燈(ちゅうれんぼうとう)を上がった途端に、雷に打たれた坊や哲は、なぜか2020年の東京にタイムスリップ。そんな設定にビックリだが、さらに第3次世界大戦が勃発し、2020年の東京五輪は中止になっていたそうだから、更にビックリ!

同じ「戦後」でも、1945年の「戦後」と、2020年の「戦後」が全く違うことに、坊や哲はビックリだが、同時に私もビックリだ。そして、そんな時代なればこそ

「麻雀五輪」の開催が決定されることになったらしい。2020年には麻雀人口は急激に増大していたが、それはなぜ？もともと、囲碁の世界のみならず、麻雀の世界でも2020年にはAI搭載のアンドロイドであるユキ（ベッキー）にかなう人間はいないそうだから、かなりヤバイ。なるほど、なるほど。そんな、何でもありの本作は、坊や哲のタイムスリップ以降、どんな展開に？

◆75年後の東京にタイムスリップした坊や哲を助けるのが、誰とでもすぐにヤル、地下アイドルのドテ子（もも）。そして、そのドテ子を雇っている怪しげな芸能プロダクションの社長が、竹中直人演じる大恩寺クソ丸だ。そうなってくると、後は何をか言わんや……。その後の、ハチャメチャというか、バカバカしいというか、何でもありの展開は、あなた自信の目でしっかりと。

◆本作のクライマックスは、麻雀五輪のメイン会場での、坊や哲とAIユキ、そして、ミスターK（的場浩司）とヤン（小松政夫）ら4人の真剣勝負。当初、圧倒的強さを見せていたユキが少しおかしくなったのは、ドテ子が撃ち込んだパルス銃のせいだが、ユキがそこから立ち直った後は、もはや負け知らず。そう思ったが、自動積み込み台が故障したため、手積み台での勝負に切り替わると、原作でも大評判だった“元禄積み”や“燕返し”等の人間（雀士）のテクニックが冴えてきたため、坊や哲、ミスターK、ヤンが俄然強くなり、ユキは苦戦に。しかし、さすがAI搭載のアンドロイド。ユキも“積み込み”をマスターすると、後は天保（てんぼう）や国士無双等の連続だ。何じゃ、これは！しかし、さすがに九蓮宝燈（ちゅうれんぼうとう）は？さあ、本作のラストは如何に？それは、私の想定範囲内に……。

2019（平成31）年4月19日記